日本一統志

自十五至十六

九

862
160

類號
冊
9

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第十五

目録

一 真田兄弟上下之兵粮拂座仍而當我之事
伯岩屋村之父子真田等合幸之事
矣真田出岩屋村引入上杉出之国難出事

一 上杉勢難攻奇岩屋村地利不依之難攻之事
伯真田依遠者上杉方兄弟以下被取押奇之事
矣岩屋權現の依加護上杉出之攻入遠是之事

一 於上田城中真田丈婦問答之事

福原達夫氏寄贈本

福原樺三郎氏記念図書館

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3—1

日本一統志巻第十五

真田兄弟上下之兵粮拂庭候て當越之事

附岩屋村の岩屋父子真田尋合事之事

并真田智岩屋村に入上杉当ハ国雅出事

駒ヶ真田兄弟方ニ京勝の本陣より使立て安

房ヶ方ニ中きゝ遊事次第合戦との事れり御覧

もれん并しけまハ其并ハ法ゆゑハ上田ニ了ス此戦なる

之処来ル御先ハ本庄繁長廉忽の合戦故来ル事通

ゝ今晩中ハ了ス此戦と遊言し須野原中ハ十事考

へ見ルハ我ニ来ル時ハ命情御故ハ扱ハいゝ事しなり

一

附昌幸出馬攻磨飯山城両子の救援両之事

并景勝真田依問答両子と飯山城引給之事

と度安房ち度ち墨ハ更臣し心ハ行り早夜のむ
御ゆりきこそ走ぬり両人中自きしなふ扨又雑
美といふ日早来りけれ持んし是程の上杉方出
勢しそ喰留んとしふ思ふ早二度分の腰兵粮斗にて
出をふ処両口の遮留むなら晩迄ハ信濃元の人等小
荷駄にてくら口三度ハ迎をり明朝の人當れし
ゆけせんと云評定流石是の者共ハ合くも或る
はくかハ精力此才ハ働ゆ是ハ智恵にも或るにも
食事ハ出来れし前後敵国にして近所に星れし
山中ハまハ求処ハしと射死前に飢に及ん迷惑

只今にも敵ふ意ハ打ハめ行せんと各敵ハ青けめ
をふ斗れりかくふ処にけ者共の運命ふ天運
お続の事にハふ思ふのもの出まらく食事ハ調ハ
の雑ハ凌しふ細ハ奥国見事ハ体取をふ稲荷
林の一里奥山に岩屋村とて百姓三十斗住居す
ふ村をりけ処岩屋権現の宮をらく長沼城ハ一里
をり先年高坂弾正ハ岩屋ハ米ハ積並し石室ハ
り然るにけ所の長百姓ハ海郷にて牽義の家人
にて一ケ村を家来の如く自由ハすけ処右衛門にて
所ハ奥国弾正入道一徳ふ父にて安房ちにて祖

父源太源比ゟ曾祖父然ふ処ニ海野小太郎ニ諫ゆ
中せし家老岩屋太ふ左馬ハ勘當ゆ文ゟ若盛より
此不生國れまハ攝居し當年五十八歳にて子孫
繁昌しゝ元来岩屋村ハ百年斗先太ふ左馬攝人
の子ニ山奥ニ来ゝ地面中ゝ耕作置儀ゟゝ水旱
殺ハもふ絶谷間の家地上田の場れりとゝ何方へ
もふ及中家来二三人石連来ゝ乱世の住居是ニ
傷る所ニあらはとち地ゆ元ゝ田畑とれしハふ三極
の上田地出来其後ハ落人四五人来ゝ居ゆ志ゆん
太ふ左馬子孫倍ゝ家来交り三十間の家居ニ

如男女二百人斗ゝ以の人別なり然るニ如くゝ
太ふ左馬判数しゝ友石入道と号し其子も判数
しゝ横岩入道とゝ七十歳孫の太ふ左馬三十名来
曾孫近出生しゝ深世ゆふ知る歟を取ゝ市ニ
出し代れし用事を達しゝ居ふ所間を代所ゝ
鉄炮矢叫関を安く友石入道中ハ若者とゝ来ゝ
何かぬ来も武士の来れりおく軍ゆハ必ず物ゝ
れり息子よ出ゝ入ゝ来ゝ何んと云大将勝負
とふしやとゝふ事を安ゝ来ゝとゝ自ゝまハ横
岩入道畏ゝとゝ一里斗出ゝ迄ゝまハ軍ハ果る

き云稲荷林にハ真田兄弟お残けきとるゝ手勢五百
にハ足手負もそこく居ケるゝ所ニ来り此軍ハ何乃
大将にてゝおゝおゝハ何と申候と思ふ廊に問へハ伴間
小者おゝハ越後乃上杉景勝一万斗の勢ハ方ハ真田安
房守の若殿方両人にて僅五百人迄ハなしまゐく
勝負ハ此方云ゝ云死知ま申候と云ハ要く安居ケ
桃岩入る人の内にハ慈き親の常さら仕し先主海里
小さ所後の恐領衛ハ武田信玄の息ハ以続せ此男
の衛ハ真田と名ゝ云ゝ上田城に此座ふと云し其
真田度かと思ひ立居りて若し真田度と申侍

ハ海野二番息の末ゝ小家ハ上田にゝ持てハ此さら
ぬかと問仲間小者安て扨て山家者ゝて扨云ハ知
事小家と云ふ位の事ハ上田城主真田安房守其方
云ゝ知て通り海野の家と申に候桃岩入る所ハ
渋し早く立帰て父友石入る人にハ此事ハ語りたれハ
友石五十八歳ハ其ハ無しもふ老耄扨ハ主衛の真
田度よヤレ此之葬ハ申せ一万の敵に五百の勢方丈々
安遠五千にて云ふへしとて孫の立ふ左馬を出し
山家ハ其ハ此も此用も何らハ牛も八疋ありて馬も三
疋此さに鉄炮ハ家ゝに一挺死ハ所持いる人と申

外り男の分ハ百人もあるふ〻何國郡の事ハふ知ら
鉄砲ハ何をり細らふも旗ハ十ハ旗は用ゐのふハ皇まよ
こや此寛助の為ふ付而は人もすきハ御目見しく
郡兵衛父子主君小次郎様ニ仕ふと思ふからハ
今生の大望一筆の后ハ行かまほしと極老の寛助
を頼しや雑す故孫の左衛門右馬走りり面談頼
入や(?)ハ須野原兵衛大ふ恨は是非ハ任存ふす
る形云ハ安房守彼御父一徳斎御物語度承りし
岩屋左衛門右馬ハ御先祖小次郎様白浜是之任御勘
気受しかさ者のり衛ふ知と斗ら行しか物ハ一筆

近き在所よれ今の左衛門右馬中御使ハ未五ツ時の
左衛門右馬走る人馬足ふ走ニしくへ走り出さく急ぎ此足ふ
の人く白国之付せ物左衛門右馬ふ須野原中ハ牛馬ハ
當分用もれし何人と兵穀をちさる事哉兵粮斗
いらく立生(?)は今此峯の小荷駄も今ふ白一日ふ喰果すと
當分の雑俵ハ兵粮れりこや世ハ左衛門右馬承れり
急ぎ用ハ夜石入急も御目此奉願ふへハあまはらく
御入下さら兵粮の事も一日二日續ケ下や二三人まハ
先ゐ是らハ岩屋村ヒと五百人の里因ゆ皆ゆ引連て
左衛門右馬を案内者ふ萬之白拇立岩屋村へ着し

かハ友石入道樅岩入道踊上らく恨早速同人いし
ヤレ法師と家々人数の配ら足者の人々ハ私宅
かハ勿体れし幸ハ權現の洋殿ハ其上の法座
と是ハ請し早速米ハれきまとも麦稈の雜穀
を飯ハ炬ら出せしか各耳露の喰如くとれり
然る処ハ飯山の岩井侍中ゟ早川縫殿ハ両勢千三
百人ゟやくと待しか真田もふ来其内ハ景勝の
大軍押来と安しかけらハ十万ハ責近日引包んで
打えまと稲荷林迄押来りしハ真田の家来十人斗
居りとふハ上田ハ立し新御立帰て迷んかと出し

重ふを捕へて相手を安ハ岩屋村ハ越しもふ
よし持ま押詰て打と景勝の本陣長沼ハも使ハ
立て岩井芋川二手の勢探ハ探んで進しか岩屋
村ハ遠国ハ迎て敵幸せしと喋しかハ九十八歳の
友石ハ樅岩入道ハ下知して入口の切通しにて防く
へし客人達ハ手も動かせ満し家々の弓鉄炮ハ
ふ銭投出よくと腰ハ屈めて返辺り下知すまハ
攝人ハ業とする者共れまハ八十人の者共ハ
りと切通しの左右ハ分きて弓五十張鉄炮も三十
挺寄せ来ふ者共ハ同の下ハ迎落し対掛打掛

せしかハ又ふ内ニ手負死人ハ道ニ寒く芋川
岩井憐激しく下知すき去て上ハ乃れし此切通し
の口一ツ牛一疋漸通ふ程の所ニ左右の岩の上ニ立
敷まし居ル所定て対出せハ敷き玉もれく遁失
れし上杉原忙然果て於相生り
此内ニ有石槻岩ハ次野原ニ重ニ有とお読しく百一
大軍れきハ乱入も疑れし此岩屋權現ハ戸隠しの
隠居神と中社家も社僧もれく我々ハ此死走い
多しこそ先年より盗賊何度と云張りもれく
百人斗死来りこれ云此神の追遁しこそ下生神

ニて百人の身方ニ増殊更岩屋の内神ハ石室ニ
しこそ百人の人ハ心易く籠ふ所れり自然大事
ニ成こそ是ニ此ハ此人ニ成こそハ越後一国ニ従来
ても来きれしと頼母ハ更人ニ合しハ各力ニ従て寃
意の要害なりと静り過らて扣へ生り
然ふ所ニ真田方ニ態こそ飛脚ニ以景勝ニ過言し
ハふハ此度将去屋代ニ語らきて其ニ遁深入
働いふしハ此ニ実崩しこそ敵ハ人質ハ充重ニ
此むふるこそ夫ニ昌幸ニ上杉家ニ出仕いてせと
ハ及兼せふハ此ニ異の法ニ上兼てハ龍室ニ助

因と云謙信已来の御武勇今以天下にて主君を
信かハ上杉侍と折合ハ我ん一出し居在しかけ度
將去を若年者と思召疲き切せる弱足成る家
をハ元国使成立まハ真田安房守昌幸子其の
恩賞にしまらく御手に下属とし思召しこれ恣
れき嫡子信幸ハ父にもふ談徳川家の本多平八
聟と如も家康の妹にて中合し命目成ふ猪
徳川方れきハ我子其定かせし二男幸村斗ハ
父と一所の志にて行共元来人名の出生ハ一人にて
生まれハ知ませ事犬猫のごとく大事後の内より

連出らくふ事れきハ死ふも父子兄弟と云共國成
備らく年遠生死も面々あきハ在ふれなきハれし
本来空の極意ハ武士の変定にさきらるかしも
江御遠慮御計えてあけ上ハ子の歓成打事れし
と云へ共思召の恥しけに安房守支追し来御禮中ゟ書
手成放せふ遊答れり
上杉少岩屋村に攻寄と云へ共地利に依て攻入
難き事
内真田遊答に依て上杉方兄弟成了討押寄事
其岩屋權現の依加護上杉勢ふ攻入遣退之事

かゝりしかハ本庄鉄安田其糟沖条河田ハたしめ
武多ハ後麿越後勢増き真田ハ口上かれ幸い
真田兄弟ハ山奥ニ入しに其袋ニ入りしも同し
事追取ニ乞て打殺と前後の着到都合一万二千
岩屋口ニ押寄しに等川岩井両手の勢切通し
にてゝ傍見上まハ二三丁の所ハ破り兼て扣ニ
生ふ所ニ裏ゝと押掛り寄ゆ大軍に切所ニ
しとハ能も云しものかれ討て味方ハ別越踊
越打入者も又ゝ討伏原ニ六百人斗岩屋掛くり
弓鉄炮にゝ討殺ゝ打倒し死骸沖し山に滅て

山と成て岩屋村乃入口の地形に等しく其ハ本庄
繁長一番に六十人おそ入二番に其糟沖後ゝ手
より三十人宗上ふと等ゝ八十人の掛人出る半ゝ村
残し者共声ゝに越後勢切通しを攻破て押込を
りと喋しかハ岩屋友石入道同松岩両人ハ権現の御
内陣石門ハ押寄真田兄弟ハ押入南無岩屋大権現
神体手力斧尊之十首神力ハ御ゝ口ゝの御
御膳今日未洋殿にたり昊験ハ御御に能し尓し
ゝ若竒陽なくんハ年来給仕の母子共忽
生害仕り岩屋と云に滅亡と御幣用ハ御膳の上

を振り立て一人ふ乱に祈禱しはまいふ思議や
白糸の神法血燈立てて赤く成しかへて下ら雑
そやくと随ま者の瀬に流す下が軸後当岩屋村
へ入と等ま閑に吐と上ふより早くら鉄炮の鞍まサ
岩石も崩るく斗に安へし処に岩屋権現の御内陣
二の戸牧の石二ツに颯と割るとと等ま震動せしか
真田方の国にハ廿箇一丈斗の太刀と見しもあ又光り
輝く斧と見しもあしか軸后方の眼にハ百丈の
大蛇岩屋の内より飛出ゝ候吹て両眼の光日月
よりも霊ゝと其暑に事火ゝの如く一百二千乃

軸後当一度に崩まてふ足ふ和近紀ハ一里二里三里
まて近散をりけ箇景勝ハ絶地に毘の字の小
四半御馬所にて立稲之行林に本陣にて居しか一里の所
にてもゝの如く俄に暑く足へ深をふ十六夜月毛と
云名馬四蹄に折て外をりしか景勝真の位の大勇
将にてハテ怪まを家をかれと御馬より下り強引て
毘の字の旗竿に取付し斗八百斗小性近習馬上りの
元中悉く倒き上りしとれり候上杉当の中に人下
を失ふをふ者ハ一人としてくれしといへ雲も足に
踏折手に実折顔に折破り怪我しをふ事あ

し歴々戎功の軍もケ様の目に遁し事務に不足曾無る紀合ふ故景勝長沼領の者ハ呼奇せ其あるしに此者中ゝハ此山奥に岩屋神と申て信濃戸隠大明神御支婦中無なれて是白御隠居らぬをふ所をりと兼り中ゝか神の外具験なりを小ゝ常の者無ふ事ふ事ぬふ事のみにて無ゝ事ハ一人として帰りをふ者れしと傳へ兼ふと申ゝ自人ハふ住やと御尋ゝ給ハ人間の住居ハ度兼と申ゝ自相ハ信先村をふハ皆神ぬかと名誉るしとれり此度迄も百年ゝ前ハ家とぬりし此人ふ

知と思へをり依て再上杉当て寄と云ふ者れし遣に真田兄弟入をふにハ給れし家来の者の稲荷林に居て其後中をきハと取是て各体取居きハ一旦ハ差き処ハ遁きをり此いへ此も重て出相れし

於上田城中真田支婦問答之事

伯呂幸出馬政唐鈴山城両ふ此救諏向之事

英景勝真田問答に仍て両ふと鈴山城引

替之事

かゝふ処に真田安房与呂幸ハ兄弟の者云ハ始め

こしらく悪くら取因絶体純命の孫子を失しか早速
もふお立座前に立上らく幡龍松か隠お掛東西南北
をえ足し繋し眼をもたふく居上るは真田か妻女
也ふか絶か祐らく安房さふか向ひ中ハふハ空か我夫の
事ハ忠ら義ら信ちりと當家も代家も押並ら中
せしか何んと五常の内かにと云ねは千人かも百人
かも持きぬものか法ハ物か教へらくのきと云掛る真田
聞らくにのみは其方聞ら何かすは如と云いとらす
へん弱き生きぬかにの道は女ハ濃は留り中清心
法用くと空嘯書女童ら物ハ義ぬはにと中かや

葉か父武藤三河太道傍月斎武田の家からくも一國
の政ろをも兼り三奉行の姿矣かしらく梶井安藝ハ
智ちらく公事ゆはらちなら福浄周斎曾ちら捌荒
く取自なし武家三河守さ其情知りの慈恕深紀
に者とも早髪信濃の取ゆはれき空か信玄ゆ名将
故か三奉行かも智に曾の三人は分ケら正しと人感せし
其娘自故父の事ハ中ハ急かも女へらか慈恕者之
にの道は常か云女せしは足侍るか分ケらく父母の
心ちなは情に恤むを年とすふと女しか義成事
からく洞の尚りかたはをにの道とハふれ但し武藤

家乃仁と真田の仁とハ遠しかやと問返しある安房
なハ書如ク仁の名ハ安より早兄弟の子共ニ使ハ
おくんし堪兼し裏問とハ案せし故如件挨拶せしか
再問ハ又とかゝみ如ハ五常ハ実儀しく吏の心ハ
探まとは其方父の三河なのけし男ハ先中安せんハ
武田家ハ今に者と仰結せし其方父百千万の国
民ハ悦まくも只一人の聟の某ニ恰其詮ハ兼て
義絶せしに細ハ序あらハ語り安せんとハ思ひし
ハ其返答思しくまハ尽座ハ難別せ恐ハ不成依
こく延引せるに妹背の中ハも難縁も不恐と

云へとも武田の家亡ひ武藤三河なるゝ法きハ如く
ハ今に御門ハ一不通命の地ハ杯（たゞつゝ）といふ名
斗ハ今者の威勢ハ新もれく男の喜ぶ物書如ハ
去ふ事聟の真田ハ未練れりと命の見へハ諫報ハ
更んハ心ハ時宜もハと相居ぶハ其方心座ハ
仁の道ハ実義する其根本ハ未練の処何まハ返言ハ
有只今難分すは上ハ事ハ御ハ相居まハ何ゝ
柳男急ハ入道殿ハ矢口去ヒ年の多ハ義絶せしハ
如何故とかおくんせ御重代の主君武田家滅亡し一
年もふ立不ハ武田の恩歓ぶ信長一味の御門家

人目足へしるく二夜ぬ米は男の竹腐とやいふらん釋さ
りけるやいふらん四辺皮生害の甚意ハ病の虚実にふ
知とも生達の法用にふ立ハ逆居る時へ武士の風上に
下正義友言行かけら及甚上欲生ふ法門を家く
ことを何事哉忠ゟ孝ゟ義ゟ義ゟ人ゟ人外ゟ一國
中に仁者の果ハあの通りけりや文宣王の宣しに仁ハ大
仁の仁かしらく如童かを云史せるも除ぬ事去るか
行ら君子は仁に能しらく仁の法は徳ふ事ハ不仕皆
く毎に情をかけ置り施し置りさぬ忠しくぬ
体も是は仁とを忘紫の辨ナイ武門の大樞ハ君を

永を臣の道ゆかり守ふかは大臣と云真田ゟ擬せす歩
忠ハ忠とを義と伝とけらハ武士の冊かしらく一つ足ても
立事れし我日ら了應祿を出るく上田の上天の家所伺
ふか足守の馬廐めふか長治はかるく一官か失すきふんか
不を登へかわふとも住居の古地に雜の家立済く消
としらく主将新近方れき八百代ふ易の運家滿然ふ
かく父子六人の主将の家を昊くと濃しとしらく城中に沈を
事ぬ親きふするか生涯忠といハ知まきふ前れり末
又景勝の手へよおえと云ふ去や文下發をかけらし及亂
世人了一年の月日ハをに年の百ヒ年かも等しるを失を元の

終に一度は他国の士に帰るか生国の士に帰るか水火
木金の四ヶ日は勿論万物士に帰らぬと云ふ事れし
何何故か憂悲んぬ夫に何ぬや仁の道より家ゆりて
呂幸祝の士の心は動し我万一親子の恩愛に引か
ふくか夫妻の愛執に頃は実もと思ふて周章驚
きて子共は家を出馬せは一戦の首武勇を誇ふ雖
弱く敵に遁て名は失ん事眼前れりサア安房守
呂幸は両人の子共は打捨て景勝に殺ちすなか
何んと其方母の所として救ふかヤイ母のわけは知
て母振るは辻夫の事ニりや母の行は生まし落ふより

して獲猴の中は昔育して七歳迄の母のき活
は歳にして小学心に入よりは悉く父の引立しにて母
も御もけしられし物出ぬ老ぞくは子に随ふ事は
母の事れり信幸幸村と名家子共に其方がけし引
て入れ生死進退盛衰共に父呂幸か軍配をり
捨立て殺ちは其方は恩愛に知ふ仁の某と心の内に
恨は丁倉不なか左衛の妻か心れまは一切一室にはふ什
ふ及是死早く親里に帰き生死の二ヶも盛衰も某等
に見物して重て子共の事に自一云の口入れ心れら
は生涯諸白髪迄も二世迄も夫婦れりやつけ候は聞

然んこ清廉潔白の詞に於て塵も不白女房なる実も
其数の勇士なり妻女聴て夫か危急角て程許合
称して出馬延引するへきは迷惑し定而と思ひ流石に
吾妻の詞会云こや其中開而清し更何か抱何は
中も家の為足ずの子共は為教え家を立ハ何とそく
もお侍し使せよ為ち於て情きき何事も弓矢の扱
謹みきれ小可よ思とえふ訪まし詞は顔色をきえて安
房なるもしめて若衆して丈なて於て真田か妻
然もいふへきし那いふ某若一年挽走向去一万斗の
就後出仕実挿て通り抜足ずは左右に目臭し

帰らん事おしもお遠ふすなき未信幸幸村か運命も
お侯出ふ事城上の運来定まきハ実きいハふ可
なき城中の者共城に立一千の出仕強し某出馬の
信め上り三百人目臭すへし吾妻の者共も八百の城
兵少け有馳着事其用と根津甚平方に死怖本差
せと云も不敵證取て投掛来既携ふへ廣間に出まし八
康几を居せり
皆城中を巌密に守へし某か陣野原に三人帰ら
ハ城をも明て入道し其九ハ信幸幸村如去に入ち
鎮地挟間所りしそ一千の皆ハやから軍の支度せ

よ早着到と来砲上きハ着到の右敵をお出し内
二ヶ国より三百人の馬上り静々と繰出せハ真田書
女ハ三方ハ敵ハ容易ハお鮑只一さんの勝栗一ト乃
しハ法師体と欲云葉も振ハ勝栗一ヶハ鎧の袖のし
一切まをハ手綱の袍ハ来砲ハ(ホノ)ゝ鮑を肥ミ馬ハ立れ
ハ手綱ハ取ゝ馬の頸白誦文静々と云出せしハ武
者振と云親武と云信玄已来の大将と名感し合し
とれり
然まハ飯山城近くに押着ふと写しく城内の様子
を守しハ岩井伝中守ハ城ハ拂ゝ残出芋川縫殿

と二手ハ真田兄弟の元ハ後ハ道ハ行へきり止る
との事ハり昌幸け事安堂言スハ敵城ハ云取を
りと城ハ近日と知ゝしく城ハ云ハ城本戸ハお被
ゝ入て見まハ御百人家老人小幹の分際と芋川
手の者共の中手負をハ兵共残居をる事ハまハ
一方ハもふ及手向軍ハら切倒逐ふハ逐せと下和
しゝ只一時云ハ云取をり真田郡ハ上田ハ立
武士百人地下人百姓の弓鉄炮雑練しをふハ三百
人鎧と篭重ぎまより直ハ長沼表の上杉当ハ
とゝ潮の如く押出しハふ処岩井伝中守ハ居城ハ

方に閑逃に聞へし故中途迫相安に出しはふ度
真田安房守小勢に以押寄城に深取せりと安し
かハ大に驚る程我出勢の心れかりしに芋川にすゝめ
らき一生の不覺此事是恐家老の如く五百人の勢
にて押来ふ出合かしらに閑に上ヶ合ふと等しく
双方接連打て入一足も引れと互に恥しめ戦しか
真田方は小勢れり岩井の三増倍の勢にて城内に
落出ふ恐ま故勇勢一際いかめしく真田方既
から突立処に安房守沼幸はよしに見て其分際
にて景勝幸陣是手詰の勝負可ぬ我雖先

にて拂除て可見ス迚十文字の二間雖長突にて
三天なるまハ柄共に二間半の雖に以て突入し左
右を突拂ふ柄ハ鑓を拂ふにふ吳真先に進む
親後勢ハ八人押にて伏騎馬も六騎迫打落ち
き傍探出を見て安房守後か長柄八十本出と返し
て突入しかハ岩井の八百余人一度に崩まして五六町
引立処に安房守大音上ヶ押き立て進しかハ守
色其事も如く混崩にめて五六町の内にて三百
余人討きせりかゝふ所白芋川縫度分けよし安か
早く一騎駈に走り着て岩井に助んとせしに

岩井は敗軍する新手なり芋川は五人三人死失来
る処に五百余の真田岩井の皆押合て敵味方は
分兼物程の事にて進む芋川手の者共崩るゝ所
方に追立ると思へは其中か真田安房は是分ケ撰
打に討取故ふ及是能岩井侍中芋川継使外両安共
に敗軍は此急数は此かりなるかゝる所に景勝方聖
双方に扱入せる誠後国久上山の学頭信州川中嶋
善光寺真中に割て入衣の上に玉襷は掛弓矢は
世ふくしと長袖中へ入しかは真田は樹子の色は
化して扣きは岩井芋川をしのとして誠后皆も

打納せり此扱ひ此方は兄弟の真田は国は解岩屋
道は開け帰国をへし然は真田安房守使には川
中嶋四郎の内水内郡と二科黎貝津城は御宛り下
上杉幕下に属る様に聖の事なり真田ふ様其意
示しと中度事なりしか真田経の侍か二人の子の先
に知かまし信濃二郡は以上杉家に出仕せし聖は未
代追消かゝ紀家の瓶瑾然は京勝は方に真田中
入ゝは瓶をふ士にても用立は此所重ゝ小謙信は遠
風と及ゝ乗ゝ処に存の命ぬは事にて扨り礼下和か玉
けへ瓶をりと玉摺極色しかは代々の若ふ百ゝ剣

や濁悪の乱世江戸にかくけつ疵出来せかふ処へ
何ぞもあれか張瑾をふ某の石はこの座大に
濁て聞へこれはいけ奥田昌幸伯虔（夷カ）救齋に侍らけ
き云越後の縁はふ丁食仏し代物給はるとて某家
取立ふ飯山城のほは先年武田家か越后の内の長沼
に城の構中立ふ所謙信は江念ひとなりて信州の内に
於て飯山城のとも築て出ぞ武田上杉牛角の弓矢
ぞ如けまは神と人ぞに国の城の他国に立ぬは奇
代の例本郷の国の城の明神は奥州の地内に立ふも
神の位に勝劣れし又上杉の城城の信濃国にふみ

越して飯山にと立武田領の城の城の越后地の内へ
と立て両将牛角の御威光弥文飯山城にまは築
ら立し所上杉か當屋形天正六年秋中全成然る
成し所景勝は祝樽と兼ぬ左程の粉骨所と励
立ふ飯山城の奥田安房守かくの平に義て有
ふ所津景勝十双倍の昌幸と是斗は自説仕ふ悴
云は江宮江位形正津乙ふ知童去れまは昌幸かん
には石尾と持んしかに眼前にから取父昌幸に機物
に掛けんせるへし盃の扣へて弓矢の者と仕らん
濃の高祖は父ちは頃程方にて生捕軍門に於て

奥板白縛り載せしをはへ歌笑て父天下と弁
智とをそしハはなをるへし制作兄弟の真田
かな何等家名かて智作上杉家ハ名聖利との
二りをハ何きは清賞既に成ふ作真田安房なる
利は見る事ハ此夫のわけ名は取る所以義士にて
いふ事ハ然るに岩井は清し並し飯山城と兄弟は
智よとれらハはお使て仕り其外の事にてハ無
の利は取る所同にてハ兄弟は突出し毛頭悔る
ふなし武士出合に賞取て代りは出すハ於和漢
其例れし上杉家のはち失け度民の艦をなん

ふ静に洋也とかしもなるは不顧安房なる小辺り果
景勝は聞きて智宮に於て當代の士をなへし
何とやらん真田の口車にて載て国は解て兄弟
の者共は返しをす処ハ景勝法智の将と評せんか而
兄弟は教ハ尚又ふに不義真田の批兵は打たとく
高軍と可云ハ深き失の疵より岩屋は害しかハ
不思議の事は遁き兄弟飯山迄帰りをまハ真
田も飯山城に兵粮を失玉茶茶同様は お添て士両
人中間五人何並て岩井侍中守に渡しれんな
く親な同道して上田の城白帰りなる

一 武蔵国は古十二国の列の差次第一なり

一 東西南北共に三十里

一 国府は多摩郡にあり

一 国分寺は多摩郡にあり

一 国分尼寺は多摩郡にあり

一 惣社は多摩郡にあり

一 国中の神社は大小合せて一百三十二座

一 国中の駅は二所

一 国中の山は秩父山・武蔵野・高麗山・金勝山・三峯山・大山・日の出山・御岳山・高尾山・陣馬山・景信山・小仏峠・関戸峠・多摩横山・多摩丘陵・狭山丘陵・加治丘陵・八国山・鎌倉山・金子山・金剛寺山・金乗院山・金蔵院山・金仙寺山・金剛院山・金剛寺山・金乗院山・金蔵院山・金仙寺山・金剛院山

一 国中の川は荒川・入間川・多摩川・秋川・浅川・大栗川・乞田川・鶴見川・恩田川・境川・帷子川・侍従川・滝の川・石神井川・神田川・目黒川・渋谷川・古川・桜川・古川・桜川

一 国中の湖は二所

一 国中の滝は二所

一 国中の温泉は二所

一 国中の名所は二所

一 国中の古跡は二所

一 国中の寺は二所

一 国中の神は二所

一 国中の仏は二所

一 国中の人は二所

一 国中の物は二所

一 国中の事は二所

一 国中の言は二所

一 国中の行は二所

一 国中の心は二所

一 国中の身は二所

一 国中の命は二所

一 国中の死は二所

一 国中の生は二所

一 国中の老は二所

一 国中の病は二所

一 国中の苦は二所

一 国中の楽は二所

一 国中の善は二所

一 国中の悪は二所

一 国中の罪は二所

一 国中の福は二所

一 国中の禍は二所

一 国中の吉は二所

一 国中の凶は二所

一 国中の貴は二所

一 国中の賤は二所

一 国中の富は二所

一 国中の貧は二所

一 国中の男は二所

一 国中の女は二所

一 国中の老は二所

一 国中の若は二所

一 国中の童は二所

一 国中の幼は二所

一 国中の嬰は二所

一 国中の胎は二所

一 国中の産は二所

一 国中の育は二所

一 国中の養は二所

一 国中の教は二所

一 国中の学は二所

一 国中の道は二所

一 国中の徳は二所

一 国中の仁は二所

一 国中の義は二所

一 国中の礼は二所

一 国中の智は二所

一 国中の信は二所

一 国中の忠は二所

一 国中の孝は二所

一 国中の悌は二所

一 国中の忠は二所

一 国中の信は二所

一 国中の義は二所

一 国中の礼は二所

一 国中の智は二所

一 国中の仁は二所

一 国中の徳は二所

一 国中の道は二所

一 国中の学は二所

一 国中の教は二所

一 国中の養は二所

一 国中の育は二所

一 国中の産は二所

一 国中の胎は二所

一 国中の嬰は二所

一 国中の幼は二所

一 国中の童は二所

一 国中の若は二所

一 国中の老は二所

一 国中の女は二所

一 国中の男は二所

一 国中の貧は二所

一 国中の富は二所

一 国中の賤は二所

一 国中の貴は二所

一 国中の凶は二所

一 国中の吉は二所

一 国中の禍は二所

一 国中の福は二所

一 国中の罪は二所

一 国中の悪は二所

一 国中の善は二所

一 国中の楽は二所

一 国中の苦は二所

一 国中の病は二所

一 国中の老は二所

一 国中の生は二所

一 国中の死は二所

一 国中の命は二所

一 国中の身は二所

一 国中の心は二所

一 国中の行は二所

一 国中の言は二所

一 国中の事は二所

一 国中の物は二所

一 国中の人は二所

一 国中の仏は二所

一 国中の神は二所

一 国中の寺は二所

一 国中の古跡は二所

一 国中の名所は二所

一 国中の温泉は二所

一 国中の滝は二所

一 国中の湖は二所

一 国中の川は荒川・入間川・多摩川・秋川・浅川・大栗川・乞田川・鶴見川・恩田川・境川・帷子川・侍従川・滝の川・石神井川・神田川・目黒川・渋谷川・古川・桜川・古川・桜川

一 国中の山は秩父山・武蔵野・高麗山・金勝山・三峯山・大山・日の出山・御岳山・高尾山・陣馬山・景信山・小仏峠・関戸峠・多摩横山・多摩丘陵・狭山丘陵・加治丘陵・八国山・鎌倉山・金子山・金剛寺山・金乗院山・金蔵院山・金仙寺山・金剛院山・金剛寺山・金乗院山・金蔵院山・金仙寺山・金剛院山

一 国中の駅は二所

一 国中の神社は大小合せて一百三十二座

一 国分尼寺は多摩郡にあり

一 国分寺は多摩郡にあり

一 国府は多摩郡にあり

一 東西南北共に三十里

一 武蔵国は古十二国の列の差次第一なり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志巻第十六

目録

一 前田利家出陣之事
佐々内蔵助人数ヲ率シ末森ノ城攻ル事
并奥村助右衛門絶倫ノ極勇事
一 奥村妻女才覚ヲ以金澤ヘ乞後巻事
仍テ佐々八落發機変之事
并奥村守城之不拔忠勇之事
一 丹羽長秀忠義ニ依テ人ヲ以末森加勢之事

伯利家未来後世之土馬奥方振武式事
并奥村宍運の上利家賞ふ誠時ニ事

日本一統志巻第十六

市田利家由緒之事
伯佐々人枝ハ元ヶ未来ハ政ル事
并奥村助ち恵後論猛雪之事

為人眼耳鼻舌心の五根各明如者なり是を聖れり
又一根ゑ勝き生ふ者をさつきハ中の人なり一根も其
能ち行者ハ悪れり然るに一根しの拠ちハ規矩と
云仮し同利聰鼻鼽舌利心利は中に同を行の臓の
能ちし象口舌を心の臓の能ちし象故利の字ハ書ク
仰る常に利口者ハ何きを云利根を知れし利根といふ

時は五根云に利とふくは云へハ有り家に信長の性
立かしとて秀吉の政をの代と成て接鮮の官録進
こし前田又左衛門利家と云へ本國前田の庄の人なり
菅原家と云ふ事は人識りて左に何ら次云ハ古録は
ふ知へく偏執より云出せふ人なれり
柳其先祖は菅お逐八人の公達なりしは國こへ左迂
せらはて屋別前田ハ口も一人と流す知しか其まれる
事明白なり其村の鎮守に天神は祭ふ事は次
知まとり又左衛門十五歳の官信長法の性をふ事
名家は求しか常に呼処ハ何名にして実名ハ

其本意は誰にか可頼とをしに其次洛中三好黨
か我意に仰て公方家も感喜へ政道官領家乃
執事の事より萬事を下知する下尉上の乱世れ
まハ公家は尚以官計にて録は先ふ是洛餓死する
数をしハ古今希をの喜慶れ書依て録は求め
國こ口ら下乃公家元ふ洛中にも屋別口ハ儒林の
人こ二三輩下向をて所は民間に寓居しなふ又
章時士ハ又左衛門便りて名家は求し処に波時士乃
聊ら中ハ顔強は以考へ可き文字ち切れり然て十
を余口掛りて利家と称せよとを其人は問しに始

國の元は天象せしは五根の中に所ふと云て同利と
ふ利なり其方國家は利すふ名詮自證如へし
と宣ひしか名家は大事の物れり如考云前因又大事
次第に立所諸士は誠し尚文他の同利上にかゝて義
豊し名をふ士の分は禮義を厚くしてよ招市
まいは年々民功の者共容分の如く遇留してハ事
ふに流み營意に法足しそ悉く家来と御出り
能中奥村助大馬拓は天下諸侯重しかゝ各類
かし家来にと云御し故奥村も家々は人々
ふ所廻いんきんに使は以招待し殆に前田の家に

足は止め加能両州の城来要の城は持かしめそ
利家日本一の大家は無法まし子納は
去年夏加州石川河北の二郡は秀吉かけし家ゝ知
行すふ故今澤は以利家在城とせんに能聖加賀
の間に繁の城なくそはふ了什何まの地了然と家
くは近年そ評義をしに来要の城両國の境目
れまいと一変しより係其以越中國留山の城主と
しそ越中を護侍く功蔵矢事信長は元立の勇
士続く者れし彼か居城にも近し味方を雑き両
國の境目には誰は可了並ぬと凡そ利家は其質

初のより一分の智は發する事は嫌はる自己の
工夫は隠し家へ其は呼くこの不簡は安合宜
はきは某も左衛門をんしをりとこそ其通に事は
取行なる係こそ利家なるまは万事分別し評定
の意必ず極の方云は発せんとも掛し故無量の
者出来しは主将の仕方にも寄ふものゝ是に仍る
未来の妙主と定る事家来の分は近く手諸方滅亡
の家くより来は者にしてく卿の此何きは立退
入江事を難なら彼未来妙主のくは更発しこそん
よとも中出しに悪く誰こと中共奥村助左衛門に勝る

者云て為ゝ勇ゝ智何り信ゝ士れきはと元の推量は
安く利家も某迚も奥村助左衛門ゝはと思ふ生
り此ゝ去年五月七日入部す是前国の家来の内
妙持初くれきは助左衛門も始勇む
奥村助左衛門同助十郎二男又十郎一族は撰未来に入部
の祝式武士の本重ふること諸人浦やミしとれり
未来妙与力以に千秋主度分此ゝ朝会出の士に
しこく利家最初信長か軸前府中はと宛行し御分
口抱をふ此功は以如斯其外高野瀬左近大西
金左衛門野倚孫助同与左衛門三好勘左衛門野瀬蒙恵

兼科新助三條勘左衛門孫十郎野侍新三高侍北葉
前波三四郎西井四郎左衛門右寛竟の勇士を与力に
りて上下八百人余の勢にて来歩の城に持たり
然るに當年小留信雄羽柴龍前守秀吉鉾楯と自
越中守護佐々内藏介成政も信長の御恩も忘
して信雄の方に志に寄一万五千の勢に卒し先進
所の城に政落ちんとて来歩の城に押寄せる
処に元来奥村大雪の者にてかしもふ思兼て
一度は越中の國より下寄事もあらんと思ひ儲せま
は皆籠城の用意をよとも死すふ金沢より自

せふ与力以千秋主度外中者ふは二千三千の勢に
ふて八百の城兵に以持言へ下中二百近き勢とぬ
きは急に金沢に後邑の事中出し下然と奥村に
呉通すふ奥村助左衛門も云合主度外に脱自言
はふは某不尚とは格別なり抑去年中當城に
敵の意利家より中は城に常の要害為兵計にても
其分なき共越中國に計双の強勇なふ佐々内藏
居る事なきは彼きは龍前守とはかし備せる者
なり明日にも事何らん意に越中勢向へし然者
寄手は一万人上と積ふへし八百斗にてはかりかし

何卒は上五百も勢ひ加へ申し重ねしとなりし
を此助左衛門ハ八百もるとなんしと行云伝れ
きハ但其言ゝ何千もらくも法益一人にても用立
兵なりかしも法家きふすると奥村の左右の手
胴に自て法へ居ると安し石ゝ城ハ法要と思ふ
ほと申切せるハ可なる故れり然るに今敵寄る
と云ふ法斗にて一矢もふ合ふ法ハ接兵の法中
きゝく家初の云ふ遣れりて城の首に於て勇士の法
は敵せものれき丈云ふたなとなんしゝ元ハ早く
全法ハ逃帰ゝ中と申故千秋主殿所ハ始として

縦令ゝ責千云當城の卒くなる奥村左衛門ハ
思ふ上ハ我ゝ何しに遠変すへしと云ふと伝戦
の用意せるに処ハ法ハ内蔵介御政一万五千の義
中勢ハ引卒して間近く来るハ奥村下知し
て仮から引籠居ての伝戦をハ敵無威を以吞
ものれり町口近き出一戦して下引入と奥村父子
三人与力足の輩を百人斗左右前後に随ひ出て
出ると等ま法ゝ弱ゝと等ゝ引退返進ハ勢ハ
二ツに分て自入家取らんと無略勝きし法ゝ故逃
るに何ゝ迫にあらハ弱ゝと引可ハ城兵ハ守り

かしさしと追て進む所は奥村本知しを大音
上ケ歌大柴にて弱くと申天は消入り後柴は可呉
と云ふ事り深に紫れ引取きと本知すきは各取て
返す処に作くり先手三千斗大波の打如く吐と事
ふは奥村兼て支度せしかは町口は自焼して
引入ひふ故は煙りに遮歌方却て煙りは吾ひて
難なし進ミ兼ふと云へ共作く方先手の大将野々
村主水正遠慮はれし誰かを切て通き中本知す
ふ処親中柴の物頭本庄清七郎市兵衛は上杉家
本庄美作守なれりしか謙信は遊去以後三所

落平次家督は争の落三ヶ方はせし処親美作守
家要は極老にして皐の内お果るもなく三
郎方員公事度々に及しかは長柴は景勝上杉
屋形に居りなふ故ゆゑ文手は下ケ降矣して
居りぬ諸士の未座に屈んも江ゑ忘れりと見て
云に上杉の家は立退親中の国に送しに作く
内蔵介聞自見清七郎は長柄ゑ行に出し
才市三郎をは鉄炮足師三十人許て物頭とせし
故作く家来と如て暫く深せは丁見合迎居て
ふ処は度未来の地責にハ見て云に一の先後

野ゝ村主あり俗ニ組合ニて運しに依て方の鉄中ゆゑ
云未要の地悪様の町口を異村方より自焼するゝ
烟りに是切通りかゝれをうへて本店清七日の
者五十人組の長柄五十本都合百人の者共を招
野ゝ村何程下知ゝ技ても火気悪しくまい通ふ
ものゝ云ひて是を押掛て火の消せと云程出来候
延共ゆゑ取寄二ツ死に切て水に浸し是ゆゑ柄の
先に自て焼ふ町口ゆゑ消しに通る本店清七下
知し口へあゆゑ宮ニて働ゝ候とて先に軍ゆゑせ候
火事消も七日之れり依て方十ツ此ゆゑ尽くゝ又敵

方の焼場を防く本店ハ如何ゝ沿りか酔異かとは
小ふ寓し者ふゆゑ清七大音上ケ長柄ゆゑするにも
軍ゆゑ急くにも為かゝるくの事ゆゑ何も本店ゆゑ
出ふ所ゆゑハ通けぬ事の為ゝより通りゝ候
云内に町口の火消ゝと一度に熱雪迄通ゝんとする
処を本店勾長柄五十本ゆゑ依て方ゆゑ押き立て追
散らし我々の者共に消けせらん易くおそく入
家ゆゑ他人を可通ふと云ふ候に本店清七一番に
町口ゆゑ取上りしハ流石謙信の御例にもとく武
辺入しとる程もとゝく感ずふ者もあり然ふ所に

城中ニ早ク引入ルニ故敵一人も取かりしかハ
牟庄遠隔ハれしゝ迄也ハ奥村方の三好勘
左衛門野瀬北帝左衛門両人ニ厳しく引入しかハ佐々
方牟庄かゝ手の者共十人斗射しく辺ハ処ハ佐々
木戸ハ之野瀬三好逆し合ゝ鉄ハ取扣ハ立ゝ
返逆し牟庄かゝ手の者首二ツ鉄の先ニ賞ハ立帰
ハきハ城の者共敵ハ入込まやせんと木戸ハ立る処
三好も野瀬も立出ハ脱ハ了ゝ付見へしハ奥村
けゝ安ハ走出ゝ声ハ揃三ツ丸の塀乃上ニ立敵
きゝ志ゝる御御する者共かれ早々引入よ其鉄

を汚し出しゝ汚引揃上んとや故三好と野瀬二牟
の鉄ハ寛出しハきハ鉄の柄の真中ハ握ゝ奥
村一人しゝ鑓武者鉄ハ取りしを男やくと塀
の上ニ引上しハ早代の勇力ハれり佐々方の者共も
何きよくと見物するハ内ハ法恵引上ケしかハ城
方ハ帰勇む事限れし然る処ハ三の丸の事構の
上黄石をふ下重しを城内ハ誰ぞ出ゝ下しハ
と云しかハ敵ハ十人斗浩揃し故下しハ出るもの
なし奥村ハ与力野侍孫助同なる恵とゝ兄弟
を怒る処兄の孫助ハ人ハ剥れき共力量れし弟

なれ惡は力量十人に比し勢へ生き云隠病にて
一人戦場に出て働く事力なくとも不叶けせつ
兄孫助中は武士の足と云て来代迄此の種に残
ふ此ケ様の取れりいそし勢く兄弟しを揚
簀に成下しに可能出と云ふは早意は弟なれ惡か
力量は當にしてし多樂の中に出へしと云へは弟
なれ惡なるをかしに云ふ勢の敵生ケそは得す
法し法に用なりと云兄孫助中は支程法は命
情し紀か兄弟の親稱し此きはいつ誓切て
捨置しと云てすはと接はきは弟なれ惡ふ及是

紀たに雖然し如程第ふ程に切ふ事法用なりと
て兄弟お連出しは之て如果敵走り掛りしか真
先に両人来ふは兄の孫助渡り合て切合れから
弟なれ惡に何の敵は人孫に敵の方に投込ふ程と
下知せし故弟なれ惡ふ程なり迚走掛りて組み
早く一メ志のて働せ法弱ふ処は引組五六十人の
敵の方に お込て仁王立に寄立熙然として居
ふ敵方も所は化して（消のむつて）ふ掛兄の孫助脇に立其
弟に切り合れからヤレ名は名なて高名は聲せ
とせしこそしかは渡り教て前田又左惡方奥村を

力野濟とは悪とハ和事れりと云搭引返す首
潮足の孫助ハ敵一人お取引入ふなは悪を押へ
寃かし力の草引ふまゝ働けと云へハ弟とは悪
中なるハ城中ハ大勢居るか細く斗なれハ働事
ハ損れり帰り濟せふと云故又已きと切かと接刀
の血ハ染しを振上げおとせハなは悪事の合せて
洋ミ吏れらハ働ん切るなれ他人よりハむさん
見れりと取て返し人の五人十人ハ心易なき云
とふやら命か搭ふかと汪ん元働かをしと和語
れからふ勢の中ハ割て入蹴倒し人ハ通り取

投て白血の吐せ引續第し十六人近お殺せし
かハ内藏助方所の濟し冷し紀大力の四五所
家引えて起道具を旗本の前傳ハ立持出
て下知のなふ故深働もふ又事と見弟ハ静と
打連揚箕ニ成下し引入しかハ其後加能越三列
ハその美談とせり城中籠ふ処の富士寃意の
者云れまハ卒ハ責かくく見へしかハ只焼お
汪ん元とて風の吉ふ成法人白て二の丸近紀在家
をハ高野瀬左近大西へ出ハ悪城中ハ翌日出て
焼拂しかハ人々ハ火の用心斗事要れりと防戦の

測於おしく小江池の籠城望国に迫へしかども
早くも高野の事れまいれ恵貴の持楯かなとて
を寄手し鰥鐘が鳴らし鉄炮の音矢叫の
声冷しき軍百千の雪の如く嘆呼らく責たり
ゆふ怨去城の中へ奥村父子三人一寸の法遠間
俾一形が已て防戦ふ点依て寄手の二方を負
山の如く寄手の大将佐々内蔵助仕寄の町場
巡見しそ四方が見渡し下知しきは堀鎌
見ゆふ於手痛く一責せむへし交代の兵とも
責口が一族もふ佐々平は恵足兵の新手二千

人入替て一揉に取破らんとすき共城中が奥村
助恵見て交ハ某一防せへし若豊の首ハ祝ち
首平六左衛門と云し所れまき共年寄せきハ古
の百分一ゆし去若者に当る望まとた右に伴ふ
雪士五十八人業科新助三輪勘左衛門十郎高
清比兵衛師清新六弟波三四郎白好四ゝ恵等
を先として撰武者の足の掌ちる所に冠て切て
出まいハ寄手の方スハ業が招く城兵共の出事小河の
来手が立防せす深取まと云ふ佐々に早り雄の佐々
方八百人ヲ我者らしと打て撮る処を五十八人

の如方の者共橋の上より鉄砲合初めしか如
方の鉄を強く二間三間死者手寄立らふ
こゝへしか矢ひか遠く近寄土けまけ方七
十三人付ふまいは如方も十一人打死し殊し軍来
かゝて橋詰か鉄砲寄無へ一息結をふる橋
例如紀ゟ合せと見へ上り奥村は橋の奥中か
立しか紀城の鉄か白星の甲ゟ着ゝ尋常の
鉄の柄三本撮程ゟ紀か三尺三寸の七刃の鉄柄と
成へかゝて三間三尺三寸ゟ細紀枝ゟ寄ゝ
御如くか振り上し除ケ人ゝ三年鉄ゟ忘まてしま

ハ見か返ゝ見る者人ゝ寄きかゝハ味方を寄むか
危くゝ腹一盃かハきかかしし急角一人かゝれけ
まハ思ふまゝか働仕悪しとゝ四十人の士共ゟハ橋の
上へ引込せゝ思ふ二の国ゟ寄まふ付ゝ方付ゝ
新太郎千人余かゝ鉄打物の士共関ゟ吐と上るより
早く騎馬三騎斗と寄武者七八十人と先ゟ手ゟ
走まふ処ゟ御構へ上る奥村か鉄を以騎る武
者二騎寄武者四人寄落し寄外ゝ後ハ以ゟ
打紀立ゝ進ミしか此鉄かゝ打きゝる者共も
半死半生の体かゝ中ゝ起上りかしとゝ僅の間か

三十一人追却候例しかまいは佐々新たつ丈に弱候
是は若の大力れり一引引けと云候に搭載おそ
引返せは奥村辛々と知れ年号もふ某は
大力とは何事ぞ我大将の役目にもあらはは一
里も二里も追給へ人馬ふ弱却き候へ十里の
窪岩は手地にすつ候かゝ又は先へ
長追せは鉄度は取らん事音怪れりとて四十
人斗の与力の面々は先に立奥村に志はし歌は
詩しか再ひふ音故一人静々と引入所は寛初
橋浩にて歌所方揉合し首逐かくまし佐々

方一人手錢は堀に突入橋の下へ隠ましかは首
橋の下か卒度出て奥村一人橋の上は引入る処は
適ふ思儀のこゝ名はまあきと走掛て声はもふ
掛真田中と思ひて突をとりしか奥村か柴のこゝか
五尺八寸と云こゝき丈れまは佐々方兵突入し錢
奥村か股に突入しは奥村所は潰し私かゝ股
にて股にて錢は又れかゝ城内へ引入しに錢主の
兵錢に引き拝形の内追引搭と込高名は相重
生捕ましさ其ふ運れまは首城中の者共奥村
は腕に斗力を聖思ひしに股に追力をと各所は

落しけり
然ハ未此城ハ新地有之壱ヶ年要害地形ヲ築立
斯當春迄ニ大概ハ出来候ヘ共堅固ニ無之ハ済ヽ
未ゝ堅固用害無之候ゟ佐ゝ内證聊ハ五日
三日ニも容易攻落しゝ其後ハ以金澤迄も
攻入へしと思召し処案ニ相違し塙主奥村實力
其外寵意の兵士籠し故落城遅ニ及之難く
思召候ハ兵らせしかハ未此城ハ日の地下ニ数度取
前去二三人探出しけ城の兵根ヲ何程有之を
云事ハ此ニ而々知へし　去冬年中ヽ候ヽ

主ヽ慶長の金ヲ取らせ若侍ニ以て生死無ク落城
の後ハ勢ニ可掛と申しゝ故其外の沙汰ニ申ル
此城名ゞ沙汰も可有之　去年五月末ゟ奥村依度
普請大分金澤ゟも人夫来り急ニ而去年秋
相城の米ヽ殊の外噂沙汰し　當夜表出来ルハ
城中の家中春斗噂ニ而中ニ八月中末燒米候ヘ
致之城内ゟ納ニ候去ル處の通り噂稲の場ニ
ニ候ハ當月末ニ而ハ城内ゟ収納ニ致さる事
其内ニ大軍候寄らせ城中く城中ニゟ米と申ハ
一向無之る事定ゝ後出來る事何程り払り申

堂ゑりの條に告しかハ侍ゝ大に悦侍ゝハ落城久
かふるを楚米を取ゝに極をり麦飯といふものハ
腹へふものれきハ十日の食事五日に喰仕舞
ん豊庭ゑに江邊る攻ゝ之よ一入兵粮もやく
盡つ紀る侍のゝ多病ゆへ掛ゝ一番家も二番
も江用にゝ四方のへ救庭豊交代しゝ丁責
諸と下知しなきハ半時乃休おゝ れく責をり
なふ
実も町口の地下へ侍ゝに告し如く麦飯斗にゝ
漸ゝ籠城するといへ共豊庭防戦故一時ゝに

食事語る体れきハ九月五日六日の志詠に云
早四五日の食事和ゝれしとゝへをりて去奥
村氣ゆふ落しゝ士卒ゆ一刷し八百の勢ゆ以一万
五千の号手ゆ引清十日持音ゝ討死仕をり云
江数の名誉楚と下知しなふ処奥村如房賢紀朱を
にゝ城中の如ふ去相軍ゆせ侍ふ老人の分ハ九十人
一日に只一度ゝ食侍せ食ゆ怪んし働ゝ士卒ゆおし
もふ惜食事をなへ跡にハ初かの子去の麦飯斗
にゝハ難なすふとゝ先日仲加州近来ゆ調にきし
十俵所号しかも分強りをしゆ以来麦のと紀

此故城中ハかく久しく白粥を作りて自ら
女共ニ為持白粥の兵共ニ配り遣ハしの事
ニて警固番の士足せし召米の食ヲ清度れまいハ
食事ニ窮ハかせし白粥ニ力を添へ働きし
よと豈一度ならず二度ならず自ら士卒ニ恩ありし
ハ城中の士卒感しける末代の賢女もと称かれ
其所以ハそしめ女中ニ而老人の分ハ一日ニ一度つゝ
食事して働く程ニ渡りしかハ古人ニ安
事れまいハ勇士と云ふハさら女の志ニ可尊と
義仏を今ニ語の如く兵家ニ申合尽ニ逸とをくも寸城

を枕とせよとかくて居り危
越る処宇佐美清七謹ハ思召的ニ中ニ清之
のをは沢城ハ城中兵の家ハ引割ニ和する時ハ
在のもの早く落城いふすものれり幸當城東の持
ニも誠而朝倉士の士千秋主殿助と伊波も勤則
ニて八士ニ救ハいるしといふ者れり小所ニて只
今奥村与力れとも何らんと覚悟ある一族事ニ
定ところハ者共ニ答ニ先ニ各々村越して様
掛候ところはさら見しハ使し来れりとてさ
城内の士卒ハ引割其危ニ亭く身の門ハ引入なりし

貴人至十枚は士卒への褒美主殿助ハ能登の内
二郡宛行當城の主とすべし是全く某斗の下知
にあらず信雄御下し文来て當表の降人忠直
のくさ口ハ侍ゝ内藏助宜ずお斗との様にくゝ
天下の政道信雄の御手に入らん事近きにあり
侍ゝも小信道七ヶ國の旗頭とあらくハ千秋主度
ハ大名の末頭とぬべし敵とぬ味方とぬふも乱世
の重き武士にも遠慮ふ可き様ゝ御下を
変との先文をこゝふより千秋主度ハ心替りし委
細ハ御ゝと諾しく返事の先文対返し懇く

思ふに當城与力の中に充てても同國と云朝倉吉明寺
の命同と云前波三四郎祝の惑志ぬもれし彼ゝ与力の
中にも曾智あらくふ御惑志ゝ多し先ず奴ハ第一に
伴ん三四郎親の前波九ヶ郎事は信長ハ返りたる
いふし越前の守護職にゝ御目にて桂田播テなと
近ぬまりしかふ運にしてゝ及滅亡彼ゝ人中にも
何らんも必定と客に招ハ右の先文ハ為ゝんしかハ
三四郎踊り上りて悦ひ与力仲ヶ間の事ハ某に
任せよ客ゝふ御かゝらふ屋し何ハ云にも
はるも妻鍛けて脇にふ足餓て関城雑兵の手に

掛らんよりハ敵ハ遁りたしとて家名ハ可起事
武士の本意ふるゝと語しまきハ千秋主度外仕
流し生死とも心中に咽ハ含んで在し処に為の外
叔父前波九ヶ兵衛と心庵遠く前波三四郎陣山屋
口ハ小田中に本丸口忠り奥村に右の辺をの作に
語りしかハ奥村大に悦前波ハ実地ハ感しく
時年ハ不可延とて今晩當城の城ヶ自各方の
心庵兼在奥村ハ為急ハも中入度事ニ為相
元中斗持口ハ急度ニ自重て本丸口集りこへ
しと觸しかハ何成何事ハ知ニ云ハ決ハ城ハ渡し

退ケといふお法めへしと推量しまゝもこゝ如し殊
に千秋主度外ハ百一扱にし城ハ敵方へ扱とす弱
のお法何らハ一度ハ多強中出し持苦けせ
一両日中に急に付ハ計略して大切ハ可
立と思案してくかたに行先ハ奥村に云えせん
と前波三四郎ハ使い一早く本丸口行きハ奥村
是へしと招しハ今ハ故江何ひ居る所ハ行ハ
延千秋主度外ハ搔掴ミおのき寄ふとも心ハ合ふ
に喰してけ城ハ取らんとハ能も謀りし事かれ
其中に可申と思り本きハ主度外果に お遣し以

の郡ぬは嚴ふはせて今晩のはゝ家合ハ城郡濱し
明ケ通ねと云事ぬへし然さ吳迄し可留ねと
志ぬ事なゝ処何者かたれの事ぬ中ゝかゝりや前波
三四郎よ本丸ハ案ゝれかゝ御ねせしハ其方葉
れりの庭ニ家選くに立ハ其よと申ぬきハ前波家て
其手にそれりぬ様ぬ諸へて云話せんもつ後
の裏切惜れ選くなきハ不簡に及ハぬと申ゆへ
千秋主度ぬ驚ぬきハいかぬ傷くか語云しあふ
ぬと云せもふ果三四郎主度ぬハタトハ白服け選
へ傷くに何ちは各くれりおのまゝ葉ぬも同類 士高七の

かゝ込んとせし此急はに惜ぬ選へ上ハ三四郎にて
申せしに自主殿ぬふ及一云粤村立服しそ首引
拔て付ゝ方ハ可きと云しぬ前波三四郎諫めぬに
ゝ得云主度ぬ家来三十人余東の丸にハ其主
ゝ討しと関ハ喋立へし先ゝ東の丸ハ持口の事ぬ
を可きを主度ぬ所ハ志ハしは頭ケ本丸におし込
並ぬくと云しかハ早ゝ東の丸ハ助ち惠才の粤村
加兵衛を入並主殿ぬハ高手小手にくゝし上ケ
本丸に留し処へ丸ゝ持口のおぬ葉りしかハ各へ
はお談と申ハ家の事にも何ちは當城ぬ利象

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

より就のふかより未要の城を落て和と足悟
し其上某は方便ふ士をとらくゝ居ひらの動いし
掛は同ゝとらく障ふは実ケハ主殿ハ所ハふ恥
し但初頭ハ終るき上ゝ迫東の丸に自居しるふ
主殿ハ是ハしと忙然果しるふ処に奥村中ハ各方
にも彼所立ハ其は座る二人斗も法同心ゝて三等の
未逆出来中ハ同心の元ハなんかしと云は安秘く
其上何卒奥村殿の前立にしらぬゝ出ハ足悟いし
ゝへとて早く延帰ふ是ハ一入城中必死の兵来とぬ
しハ賞紀奥村と感合り

奥村書女の才足金澤の後巻は乞事
伯地下人徳八落髪機変ゝ事
并奥村実城ゝ扱ふ茶忠勇の事
かくて未要城ハ兵粮拂庭の上ハ落城近日
と各足悟を抵ふといへ共奥村勇士の城は立て金
澤ハ後浩の事を中きるなり攻定れきハ城兵足
能ふ及処に奥村書女賢きくかゝて助ち過義ハ
ハ武士の本意をきき共退て更議せハ利家ハの恵
をかりし城ゝ攻落ゝて来ふ法ゝ内蔵ハ其事は
加別ハ攻入ゝハ前田殿ハ清ち刀にあらて未要落城

八永々の換れり夜は不問しかく自方かゝきしけ
事女の分際にて申きたるに事ふ便宜極とたれハ
自害しかく死すへし夫の生めるに共一族の生見
城中八百人士卒百余人の如子共の為れきハと思案せ
しか誰ゆかきへしと思ひし処法八と云へる諸代の
男は正直ものゝ忠義者にかく全澤白度々去年
中か親師にきし弥に利家はなの事頼れりとて
書女家に法八ゆ呼ぶらく思ふらく為和らて主人
の為と云ふ事ゆえしめ大勢の命助ふ事ゆきハ
旁けせんの奉公ふ可ることゝ頼ミしかハ如程可

笑々得共十体にて出々いく男も有是居中上は
法使かと存通し申るなゝ信ゆ始可ふことて
扨も夜はと重し故海は坊主に如来の為には
菩提に可ぬか惜き事れり夜は城中に二三人も
是遁世者の夜ゆ汝人せよ何卒数ゆふ利には
と行るまゝ沙と書女家ゆ催せハ法八不簡括列に
ゝ法衣ハ何ゆと信ゝ全く後生菩提の人れし思ふ
通ふ斗の方便にはゆく後是をとく殿の運ゆ法
関ゝいく持ろしかしらもたやしこえの俗に如可
中ゝ人しより起ふ利数深夜にそれしと申ゝに持

書如も打笑者とハ玉極の不簡然らハ文成不き
かゝるとりしに徒八中ハ法文を法法用に法所く
歓侍にて取更儀せんとも如定其所文成と取
ゝるくも所きて中和尚も時間いゝ如しゝ分にて
も骨肉破中ゝ去白状をふて仕然ハ文れしに
此度号を急に取是落地ゝ明白の内と法へ注進
中ゝいく金澤ゟ法衆ゟ下ゝきそ傍に入ゝこ乗く
と判髪し遁世者の衣成偽ゝ着し搦手口ゟ
遁き出しに巣の如く号を搦手の責口法々新
馬侍にて初頭法故米大黒の者徒八成生捕し

居生り色々裸にしゝ更笑すき共一通の出もれ
く各種とに責召しかハ和尚ハ地内妻飯斗ゝ下
迷惑の処吏法へ一両日法々故皆討死とゝ中ゝ故地ゟ
遁き出ゝ終行しゝ如去能成助り中度発生ゝ
間卒尓れかゝ法陣中にて法用ハれく去技拙ゝ如
ゝ下ゝいくあかゝき法恩にゝ米と中何成むにも安
ゝ処に法々内蔵分諸国自の功生る師入家大黒中
ゝるハ何成ハ更儀誅れり奴を幾久支坊主に
ゝ生れしゝ之よ以青衣処をり月代の説をり
沙門すゝれ計略の間者如へし堅告めしハ国高

の事ち思われり 法ハかしもふ當惑然ハ何故隠し
了中私事元来俗にてはゆくゆゑ坊中ふ縁の言葉と
ゑこと自縁の事死事嫌故當体ゆくハ身よの
元は通しまゐる坊主にぬ幸向後ハいかぬ山
寺へも引込後世新了中と只一人前に死後迷惑いる
しめ所能くもは從ふものかな新し坊主とやうて
ハ今日刺ふてまゐ出来立の坊主ゆくはゆく元
ゑく當分寺の當も法はゆゑる何卒は意思ふ後
生坊主にらぬらゆゑ難ゑ了まゐると何故見出し
をふ歸入事ちつにすかり自新ゑまハ平ち思つも

忙然果てけ新し坊主ハ志つまゐ奴かれ後生所白
汗拘り首成事ゑ元つ終羅及のちはことゆるし紀
戦場に已まゐるを紀の坊主一人技拘せしより白
矢拘の丈成技拘しゑくもよしよし言ゑ奴ぬ白
元来臆病もの故逃出をふに極らをり早く押出
しやらまよこ云故名かしも衆事れく追出しら
を法ハハ泣く汗情へくかれ坊主一人何程拘成了
喰技拘しのつく後生の為に白了善果ぬもの
をと口説く鰐の口成遁まをふ人地しをこ元紀
へ澤白弛着しハ下部に白落着をふ諫成

仕呆し徒ハ外り前田又左馬利家ハ此後ハ安ク
早き徒ハを停出し扨もし出来しをりしきき
後是しを奥村を扱へし詠ハ助ち忠義勇
の死ハ寵し是悟妻女の信忠の命ハふる次し
ハ近ましと陣領をらく都ハ勢ハ集のきる処ハ
所々ハ深説中来しハ悪く仕ハ内蔵助方の謀ハ
ハ責掛り八日ハ及ハ金澤ハ此史へらく前田
又左馬接兵出しらくハ落城の障りとめとて金
銀ハ与へ其ものも云ハ云ハ言ハきし来の妻の城
を扱ふめて早明渡しをり云云せ又扱落ハ

し云速くハ風安ハ速せしかハ前田又左馬家の者
共集りて利家ハ見ハ見ハいとく仕へ至勇
の内蔵助来妻落去せハ当も親加ハ仕へし再蔵ハ
震ハん処ハ為ハ了勝謀もれくて出馬ハらんハ
法豆の事れりいつ其當國ハ扱入来ふハ待て能
号をとへ合らく計取事いくらもよ助了を間
御延引了然とはくハ中ハふハ又左馬利家ハ中ハ
何義ハ中処ハ風説を伝して奥村ハ家生ハ和
抑何の奥村ハ若盛ハ信長ハ御ハ尾州荒
子の城を敵ハ城ハ出ハ御敵ハ意ハ押借て

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

此事之

丹羽長秀忠義我公入未來加賀の事

謂利家未來後是の出馬奥方武功の振ふ事

并奥村開運の上利家賞ふ越時事

然ふ処に小松の城にて丹羽五郎左衛門長秀は其の

ことしかハ村上此ハ兵庫尉海白金太郎加賀の大将と

して其勢三千人ニ着しとて後陣ゆ云

と宣しかハ云ふ是前田兆前ゆ利長ゟ中ハ小松ゆ

ハ頼ふ下及在間体の関へも未來城の後是ゆ利

家父子一族にて此ゟ武勇に過ぎ後是れり

兼し処に小松ゆ来て此ゟ馬ゆ出し是ゟ言て

ハ未代迄も當家の振謹他ゆふ更一族を以後語

了然とゟ申ふ智勇兼備の利長れり又左衛門

利家は世ゆ有ていしくも申ふ紀前ゆ何ら

ハ小松勢ハ海の事頼入ゟ様の世ゆ國中一揆発る

事ふ既望ゆ国下ゟとゟ中ハ金澤城代同前

又此所利家場今世加別て一家前田近江守と云ハけ又此所未之いつ迚も老中上序之進ゆ海白小松ゆをゟ俗

並ゟ上ハ如しも言きひ此ゟ来ふ出陣の子ゟ迚ハ例

も極て城ゆ此ゟ故戦場ゆ乙ふ事陣造れまハ

心命の通りに奉ゆて処ゟ程の時子ゟも何らハ出来

将信中にて佐用三ケ中とて云きハ利家も何っ
揃兵方面に可得とこゝろ籠中に入るへハ利家の
佐渡より為す所へハ内室三方に鹿斗打鉋橋栗前
迚の旅成披露し揃仕候事の事御座候き不
可ちと合之法の城代に自かららる敵ちし遠とも干
あらう一搦手勢可き事もよつ小松勢成和し城成
持言へ可や城中兵云一人もふ残け候せよ迚ハ
うや処ハ津幡者ふて座云もる沛し難中暫二万
迄ふとけまいハ陳方三分一の小勢と定出よしと詞
しりハ城中見合市田の士卒二千余當国石川

川北二郡の勢三千余都合二千余定めけり難前府
中添川の勢成浩へ合ハ定ハふるとと思へ書其内
小奥村後生害ハ無言事多角末森落城すか
押りふさ持ら利家勢か自他の是分ち失の事言宗
論よなく上帯メ余るふ処成小刀かくて切ら揺けせるも
ハ信の軍勢も同しく出死の人掛かるく一陣いらぬ
をおもふ之へまりらふ天正十二年九月十一日成の刻
かへよ澤城成出馬ちらく諸勢成離立とらし
給ふ勢けり又左衛門利家若年より後厚の如き労
とおな亜當苑やかめ事なかりしかハ清の西とも

是飛くおそせよ度けくかたかに物来らかれる
大将の思ひ切て逆ゆるまと法合しまゐられ
り
津幡所迫押着しに鉄炮の音出に安へしかハ物に
まゝ城にいふ落けるかゝ吐と競ひて恨合もむ
れり又左衛門利家山倚彦左衛門を伴着別段人よ
此し迷連の功ハ賞せらるゝ生ゑれりと言て記ゝ
ゝ中日々ふけ内に年号物ハ共ハ馬近くへ呼
号軍使義をしかし是に御馬ハ居未来ハ
早馬ハとき一左右ハ聞合のくと申族あし然ハ

兼て佐々内蔵助智勇の大将故利家金澤ハ浮説
の惑ハもふ取して号せ来らハ如斯途中にて為中
安返返しゝ御堂津幡近在に種々の取の案打教し
重々ふ故所々ハ其土注進報に中ハ佐々内蔵助ハ
一万五六千の衆ハ城ハ是ハ詰物ハ来りし越中
皆一万ハ以来衆ハ一里十方に出張し金澤ハ後詰
の衆来らハ返前し自入に加別に攻入へし其内に
今明日中の落城と思ゆまハ是ハ遠くし生る衆
を後陣として加賀の国に乱入し金沢小松ハ返
落けんとの御立に御ゆて難所に兵ハ伏生る所に

是斗のはなかりて掛りのふにはは運危くこゝかく
中出ばる者しゐし依て金沢勢云敵を惡まず
ゆゑ先らはれ返しはゞ本体にて寺来ふ敵は
はなれ可悉と中者ふはなる恩非ず利長偏
と眼ニ云早受れ迎者云かれ落城今明日の内と
ゆゑ出て奥村は見捨是かれ返しこゝ前田の
弓矢は小国の物笑と可成殊更重て往て方に武
威は以国下に迎らき生とふ甲斐にて間ま本城
金沢に帰きと云し者云は早く落立へし向後
利長は云及射面とて忽しかは利家も機嫌能

非ず守中処利なり金沢に取て返し後途の合戦は
詩内には居原にゆゑ弓矢出て むは必定れり急に用
に奥村は救んと口い一節に思寃へし年寄去をはしめ
末々の軍迫江利に倍せるには不及思安元にてけり
帰る雲の勢は分へし各の何にかゝらゝ中は津山五葉
馬云景中なるは出馬の先におゆゑすへ軍は世
しそ粉鎖し弱手の人出来は軍神も見捨ふ
と兼ね義の向処は欲するこれ勇士の賀にふる
いそし津山の江分別の斜しそ見すへしたまは
踊んくとそ詩し記かゝ来よ馬に声掛て出せ

右潔くゝ見へ生りたる若手の面とハ兼て接掛も
仕度業なかりしなきハヤレ武士の業物とハ徒山ぬへし
宮人分の五兵衛ハ一番鎗ハ大くハ前田の若武
者殿ハ利祐ハ御座かゝ以早打立と云ハ思ひ
ハ押出しなる利家於馬上法くし考へ未来落城
ハきハ早意人奥村か大雪繋きハ二時迄とくけ上
何於落去すへ候と味方の射へ案内者としてあるか
奥村か使の下部徒八唯逢しのみ未来青手の事
口何方か原の御落候御見送し如とゝ等なきハ徒八
中ハ未来東の方ハ於御千人計も可なかと城中

ハそ中ゝ私も其方かゝ待出ゝ濱手へ待出りて東
口ハ御掛ゝけ青手是解し可中と中なきハ利家
安て御口下部ハ奇特如同利の者すれとて別濱
手へ出り馬の書ふ所ハ御ハせよとて牧ハ合せ馳り
ハ折首明方近ハ横雲の是来れくも真晴如内ハ
早打入と云ふ未来東口青手の徒ゝ新志野村
主水正か政口ハ利家利長父子二手ハ分て岡の仕
と上ふとゝなる事実て掛しハ大概の事共れらハ一数
しハ可数と思ひしとハ未遣し後是と城よりの抜
討の用心厳事備し故ハや岡を合て鎗ハ追

取く合せしハ佐々内藏介武ゟ之小志ハ要し下知と
ハ知ませき利家の小性岡田六左衛門一番鉄ハ有り依
前田家かゝ兼ゝ一番鉄ハ人撮し山崎彦左衛門
野村清兵衛小村三左衛門半田平兵衛ニハ法人衆の事小ゟ
四軍一同ニ打入し二番鉄と云事ハ有きハ一番の岡田
一入高名と見へきり此四人大言上ゝ競撮く突入
しかハ佐々方もふ取合者もなり又打て出るものも
多かりし中ニ野々村主水正佐々新左衛門塙田法左衛門
斎藤半左衛門野入平左衛門矢野五ゝ左衛門鉄取て長谷碎
て突退んとせしかハ利家方徳山五兵衛若手ハ

励し一足も引れ敵方の鉄ハ各ハもの者と見へ出
り首取て高名せよと情神を一像励し突立る
処へ奇手の方ゟ中庄清七郎市兵衛橋鉄と聞て突
入しかハ利家方吐と崩き撮る処ハ前田肥前守
利長業嘆ハ有しゝ多衆の敵ニ突勝ハ人ハ合せ
声ハ揃て突て入敵の佐し初神戸を見て諸ニ
て首ハ取へし先突ゝ果敵ハ走りゝ鉄と声
を幸しゝて下知進きしかハ利家方真丸ニ如く
退ハ新入道徳八搦手の東口敵の甚解し生る処
より城の東戸口ハ立ち上ハ全澤ゟ大阪若阪ハ両

旗にて後浩に於て合戦初りしとりと告る故
城内にて八ツ夜を明ハれ其後浩にかゝ見る方
かゝ如し敵方の手立にて城内ハ突て出る様に
同士軍に熊とするかゝ程諭せし処浩ハ声に
安自城中一度に競出て扨ハ金澤の後浩の輩に
寃をり突て出て内外より揉立よと奥村本和
すゝ声の下にも三悔勢大患前波三四郎野瀬次志
野済孫助才与大患吐と突て出しかハ奥村かな
力の士能提し走り出て突立きハ馬足りの事故
孫三大患丁児少蔵男く声に上りて突立しハ始

し紀州ゆれり浩く方の野に村主水正大音上りて
一足も引屋から後兼て後浩のらん是ハ敵し生
る事れり城の者共ハ扨き辺後浩の事ハ扨き
返せ是走り出て下和ハれせハ夜明に如てハ能
所扨き合事烈まゝ揃音声しハ敵味方生に如
て扨紀立をり奥村城の内ハゆらりしと立出て
扨て厳父子れからふ入浩出馬の苦労ハ掛中をる
事かなとりやはれ是ハ助大患ハ扨紀敬ふすべし
皆に体らへと云ハ早く例の大能ハ以てハ
と扨立しかハ三十八斗の扨き立るよりハ奥村ハ

一本鉄の方果敢り事一鉄に二人三人ゝ打死例
せしかハ侍ゝ方物頭共立所に七八人手負打死
せし故殊に当ハ四方白鋼と引取出り奥村追立
五六町打死立ゝ追崩し利家へ掛け同後を御
禮申せハ利家も籠城の苦戦を尽れりとゝ申然ル
処に侍ゝ方に一侍四五丁の内に退後き出るに三百斗の
小侍なりしが金澤当の若手先能く志ゝ取もの
かれ出進みかゝるが又人悪声が掛叮りなく呼戻
し見の者共かれ我先刻か迎遅し出り退後き
出る勢に出なら以あきハ所藤長助寺鳴手と助

出て美濃国所藤崩きの見方の雰士れり弓矢取
その雰士共卒に打て掛りゝて十死一生の合戦
を重と見へ出り勝関が上ゝて敵の返し来るが待
へし出て吐出関が唱へて弓鉄炮が二段に立重
長柄が集て左右に立重城追侍が取続し侍が
見て所藤寺鳴見方金方れて静くと引てけし
を後ゝ生捕の者に関しに寺鳴手と助使の侍ゝ
内藏助旗本白きし某見方退後き出る振り
いゝ出し然と敵に与宮留守天下に生間新に
勢が以守返し利家と手語の勝負が下成候

我ら代対面ならんと掛りゝ候ハ慥に前田方の侍ハ
足元定り如きく返しその一戦ハ所方の大勝と
出来なゝ候と申越ハ故侍ハ半道程引き侍ハ
立国ハ居りしか午ゝ即ち申分むれり扨ハ
二度目ハ大勝の後向変定れりと八千斗の勢に
て静々と押来りし如ハ為の外利家利長勝ハ
全しく侍立原かりしかハ幸鳥午ゝ即侍ハ
向て大名に外きハ思案よりて上ゝ扨にて信長公
にゝ勅當例殿城ハ只迄横冠者ハ急ハ生のこ
座ミ起りし時分の又大悪にかくハ法ハ来て今日の侍

立ハ速くハ適の大将れりイサ法川取ゝ候とて速立
引返しハ利家ハ未来の城に遅留ゝて翌日早
速侍ハ方の扨頭の首十二為持秀吉の方へ参御
をゝ立未来合戦の次第委細の注進あり扨又奥
村ハ度の籠城法双の忠戦ふるゝ少ゝて感ぜ
奥村にあふ

今度並未来籠城今苦戦持定条法比数忠
義今大慶ゝ雖為少分為加増以押状ニ内千石
今扶助早兵与力ニ者三十人侍ゝて処仍萃

天正十二年九月十六日　利家

特 3
特別
1

奥村助太郎 受

日本一統志巻第十六終

藏書之記
岐巣村
幸田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160